三宅石庵とその思想 ―大阪懐徳堂史の一齣― 大月 明
中井竹山の日本史研究について 藤 直幹
海保青陵の思想 埜上 衛
原始謾筆風土年表について 古田 良一
「御蔭参」私考 梅田 幹次
村の民俗と寺の経済 ―ある無名村落寺院の場合― 竹田 聽洲
伊豆宇佐美の鳥刺踊 田中 勝雄
横浜居留地と上海租界 秋本 益利
秩禄処分と七分利付外債募集 杉井 六郎
明治初年における旧鳥取藩士族の動向について 徳永 職男
明治初期鳥取県の結社の成立と自由党勢力について 松尾 茂
明治一四年の政変と佐々木高行 梅溪 昇
自由党と朝鮮問題 ―『自由新聞』社説を通じて― 中塚 明
我が国警察の歴史的背景 戸田 秀典
機械製絲勃興期における一製絲ブルジョアの生涯 ―山梨県勧業製絲場建設者名取雅樹について― 有泉 貞夫
織物消費税廃止運動について 山本 四郎
大正前期の普通選挙法獲得運動 ―普通選挙同盟会を中心に― 松尾 尊兊
一九二二年の営業税反対運動 ―大正デモクラシー運動期の階級構造にかんする一試論― 江口 圭一
昭和初期の中日関係 ―北伐への干渉― 臼井 勝美
歴史社会における身分制に関する覚え書 藤谷 俊雄
明治維新以前のヨーロッパ政治思想 佐藤 利夫
加藤弘之における啓蒙思想の論理 ―『国体新論』をめぐって― 平林 一
中江兆民とルソー 岩井 忠熊
大井憲太郎の国権主義 山口 光朔
横井時雄の信仰について ―明治二十三・四年を中心に― 宮本 又久
西欧における日本美術の蒐集について 中村 二柄
西田文化史学の史学史的意義 酒井 忠雄
文芸学と文化史学 石田 一良
文化史管見 三品 彰英
―以上 第二冊―

（A5判一八二八頁 昭和三四年一一月 京都大学文学部読史会刊 頒価三、〇〇〇円）

（横山 裕男）

日本史研究会史料研究部会編 類聚三代格索引

類聚三代格の索引は早くから要望されながら、その作成には種々の困難を伴うところから、長い間実現しないできた。それが今回、門脇禎二氏を中心とする日本史研究会史料研究部会の手によって作成された。

本書は、事項別分類による事項別索引と、アイウエオ順による一般項目索引の二編よりなっている。第一編事項別索引は、官制（神祇官、太政官、省、寮、司、職、府、弾正台、大宰府、官使・令外官）、位階、僧官・僧位、人名（皇族、諸氏人名、僧侶、外国人名）、神・神社、寺院（寺院、外国寺院）、地名（国、郡、郷、一般、条坊・条里）に分類されている。第二編一般項目索引は、総頁数（二二八頁）の約三分の二を占めているが、このことからも推察されるように、詳細に項目が拾われており、私達の要求を充分満たしてくれる。

本書の特色は、なんといっても、重要な項目に関連項目が詳細にとりまとめられ付記されていることであろう。例えば、第一編、官制、令外官の「観察使」の項目には、各道観

察使に任命された人名、その解、その他の関連事項がとりまとめ付記され、それらの記載箇所も示されており、又、第二編の「帳」の項目には、漆帳・会赦帳をはじめとして偽帳に至るまでの計六十三種の帳の名前及びそれらの記載箇所が付記されているが如きである。尚、これら関連項目の個々の項目は、それぞれ独立項目としても検索できるようになつている。

三代格は一応類聚されていて使用に便ではあるが、そのために却つて他の類聚との重要な関連項目を見落しがちである。この点で、関連項目にまで留意した、三代格全巻を通じた索引が完成したことは、私達研究者にとつて裨益するところ極めて大きく、索引の作成に当つた方達と共にその完成を喜びたい。

最後に、種々の困難を克服して索引を完成された門脇氏をはじめとする日本史研究会史料研究部会の方達に敬意を表して、蕪雑な紹介の筆を擱きたい。

（A5判二二八頁　一九五九年六月　三一書房刊　定価八〇〇円）

（泉谷康夫）

日本地名学研究所編
大和地名大辞典　続篇

戦後の農地改革、漢字仮名遣いの改革、自治庁の方針に基く強制的な町村合併など、まさに改革の連続である。町村合併は明治二十二年の町村制実施以来の大変改で、その行政上の適否に就いては種々論義をみた処であるが、適正な批判については今後に残された問題であろう。その現象の一つとして、朝に消え、夕に生れる町村名の如何に多い事であろうか。歴史的古典的な地名が抹削され、忽然として想像も絶した町村名が群出しているのは奈良県下のみの現象ではなさそうである。

今度日本地名学研究所長中野文彦氏を中心として、昭和十七年春より大東亜戦争の苦難を超剋して、孜々として進められていた奈良県下の小字名の蒐集は、市町村の台帳・地図等や現地採訪によつて、昭和二十七年に至り十五万に超える正編を刊行してその成果を学界に公表された。正編は奈良・大和高田の二市と生駒・磯城・高市・北葛城・南葛城・宇智・吉野・宇陀・山辺・添上の十郡に分ち、夫々町村別に小字名を仮名幷現行漢字にて表記し、地域別の地図を添付している。奈良県下に盛行をみている町村史研究には盛んに利用せられている事も事実であり、その恩恵に接している研究も少くない。

正編が出版されてから七年目の昨年八月に至つて続編の刊行をみるに至つた。正編と同形のB五判・七五四頁の巨冊で、一頁四段組、正編が県下の公称地名を市郡村別に分類したのに対して、続篇は正に索引的なもので、同一地名を五十音順に蒐集し、一見して同一・類似地名の検出を可能にしている。殊にかかるものにあつて必要な事は、地名の存在を示す要を得た表記法にある事であり、その点苦心の編輯のあとが認められる。一例を左に示すと

ニシガイト　西垣内　奈・水門
　　生・平野・福畑

といつた記載法で、西垣内という小字名は奈良市水門町に、又生駒郡平群村福畑の中に存在する事を示している。市郡の区別は二市・十郡の頭文字をゴ字で、町村・大字名は二字で九ポ活字で示され、一見してその存在を